

武蔵国分寺と東山道武蔵路

国分寺市教育委員会ふるさと文化財課 依田亮一

はじめにー武蔵国分寺跡の基礎情報ー

(1) 立地と環境 (第 1 図)

東京都国分寺市南部～府中市北部に跨る遺跡。

国分寺崖線を背にした立川段丘面の北端に主要の伽藍建物が存在。標高は約 65 m。

寺院の範囲は、一部崖上の武蔵野段丘面上にも及ぶ。標高は約 80 m。

南北に縦貫する東山道武蔵路を境に、東側に僧寺、西側に尼寺が配置されている。

武蔵国府 (国衙) からは、北西に約 2.8km の距離を隔てて立地する。

(2) 構造と規模

概念 「寺地」 > 「寺院地」 > 「伽藍地」 > 「中枢部」 の多重構造 ※僧寺の場合

①寺地

東西 1.5km、南北 1.0km を測る。寺と周囲の住居跡群が広がる範囲で、国分寺市・府中市の両市域に跨る。

※国分寺市域ー武蔵国分寺跡僧尼寺 (国分寺市 No. 10 遺跡)、武蔵国分寺跡 (No. 19 遺跡)

府中市域ー武蔵国分寺関連遺跡 (府中市 No. 1 遺跡)

府中市栄町三丁目「万作の木公園」内の参道口を南限とする。

②寺院地 (第 1 図の A - E - F - H の範囲)

東西約 900m、南北約 550m を測る (北辺 642.9 m、東辺 592.9 m、南辺 728.6 m、西辺 546.4 m)。

修理院、政所院、花園院等、国分寺の経営を支えた付属施設を包括した範囲。

③伽藍地 (第 1 図の B - D - I - J の範囲)

東西約 370m、南北約 400 m を測る (北辺 384.1 m・東辺 428.3 m、南辺 356.3 m、西辺 365.4 m)。

南辺の西寄り 3 分の 1 等分線を中軸線として、伽藍地区画上に南門を配し、その北側に中門・金堂・講堂・北方建物が一直線に並ぶ。伽藍地区画の南東隅に、七重塔がある。

④中枢部

東西約 156 m、南北約 132 m を測る。中門より両翼に延びて、北へ折れ、東西僧坊を取り込み、講堂の背後で閉じる。中門・金堂・講堂が南北に並び、講堂の南東に鐘楼、南西に経蔵、鐘楼・経蔵の外に東・西僧坊を配する。回廊は存在しない。

※尼寺跡 尼寺の構造は、「寺地」(僧寺と共通) > 「伽藍地」 > 「中枢部」と呼称。

①伽藍地

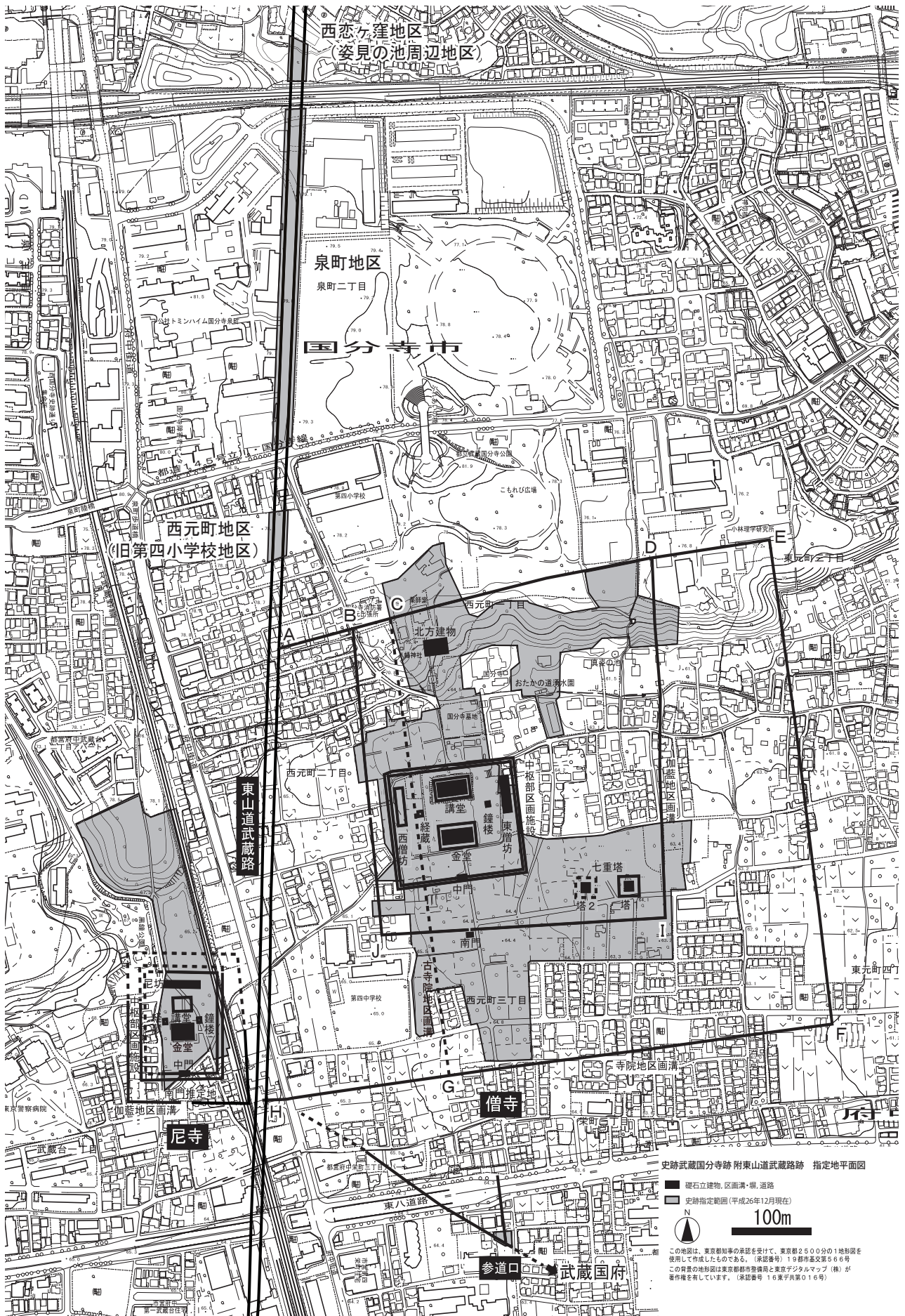
東西約 157.1 m、南北約 185.7 m を測る (北限は後世の削平により未確認)。

②中枢部

東西約 107.1 m、南北約 135.7 m を測る (北限は後世の削平により未確認)。

中門・金堂・尼坊が南北に一直線に並ぶ。講堂・鐘楼・経蔵は未確認。

※中枢部・伽藍地の中心やや西寄りをには、南北に中世の鎌倉街道が縦貫している。



第1図 国指定史跡武蔵国分寺跡附東山道武蔵路跡概念図

(3) 変遷

I 期(創建期) 国分寺が創建された8世紀中頃を中心に、8世紀末まで含む。

I a 期 塔周辺を中枢部とする伽藍計画。寺院地区画溝の西辺は、古寺院地区画溝。

I b 期 僧尼寺の創建期。古寺院地区画溝(西辺)を埋め戻し、西側に拡張。

I c 期 8世紀末頃。

II 期(整備拡充期) 塔の再建(上限845年)を中心とする9世紀代の時期に相当。僧尼寺の整備・拡充が行われる。

III 期(衰退期) 寺院地・伽藍地内に多くの竪穴住居が進出し、寺の存在意義が失われる10世紀中頃から11世紀代に相当。

III a 期 寺院地区画溝が埋没し、寺院地内に竪穴住居が展開する。10世紀中頃以降。

III b 期 伽藍地区画溝が埋没し、伽藍地内にも竪穴住居が展開する。11世紀以降。

[参考年表]

和銅3(710)年 平城京遷都

天平9(737)年 国ごとに釈迦仏像一体・脇侍菩薩二体を造り、大般若経一部を写させる。疫病(天然痘)が大流行し、死者多数。藤原四兄弟(房前・麻呂・武智麻呂・宇合)没。

天平10(738)年 国家隆平のため、諸国に最勝王経を購読させる。

天平12(741)年 国ごとに法華経10部を写し、七重塔を建てさせる。藤原広嗣の乱、恭仁京遷都。

天平13(741)年 国分寺建立の詔発布

天平16(744)年 難波京遷都。国ごとに正税四万束を割き、毎年出挙して国分寺造営の費用に充てる。

天平17(745)年 平城京遷都。

天平19(747)年 東大寺大仏殿建設始まる→751年完成・752年開眼供養。国分寺造営は3年以内の完了を命じる。

天平勝宝8(756)年 聖武天皇崩御。諸国に国分寺の丈六仏の造仏、造仏殿、造塔を促す。

天平勝宝9・天平宝字元(757)年 府中市武蔵台遺跡で同年に比定される具注暦が出土(漆紙文書)。

天平宝字2(758)年 国分二寺に金剛般若経を安置し、金光明経に添えて転読させる。武蔵国新羅郡新設。

宝亀2(771)年 武蔵国、東山道より東海道の転属。

承和2(835)年 武蔵国分寺七重塔、落雷で消失。

承和12(845)年 武蔵国男衾郡前大領外従八位上 壬生吉志福正、消失した七重塔再建を願い出て許可される。

承和14(847)年 武蔵国分寺中院の僧最安、一切経を书写(法隆寺蔵大菩薩経巻13奥書)。

貞観15(873)年 相模国、漢河寺を国分尼寺とする。

元慶2(878)年 関東に大地震が起こり、特に相模・武蔵国の被害甚大。

元慶3(879)年 地震で相模国分二寺焼損失。

元慶5(881)年 相模国、漢河寺の国分尼寺を止め、元の尼寺を国分尼寺とする。

治安3(1023)年 武蔵国分寺を修造する。

元弘3(1333)年 分倍河原の合戦で武蔵国分寺消失(医王山縁起)。鎌倉幕府滅亡。

建武元(1334)年 新田義貞、武蔵国分寺に黄金300両・加羅200目などを寄進する。

建武2(1335)年 新田義貞の寄進により、武蔵国分寺薬師堂再興される。

(4) 付属諸院

①大衆院・政所院 僧侶の日常生活を支え、寺務を執る施設。伽藍地内の塔北方～中枢部東方。

南北棟の大型掘立柱建物が分布。

②苑院・花園院 野菜や仏花等の栽培地。塔の南方域。竪穴住居・掘立柱建物分布が希薄な地域。

③東院・中院 尼寺伽藍地南辺溝出土の墨書土器「東院」、法隆寺所蔵『大菩薩蔵経』巻13の奥書に「武蔵国分寺中院」の表記(承和14(847)年)がある。

④修理院 営繕関係施設。伽藍地の南東側、市立第四中学校の発掘調査で鍛冶工房が検出されている。

⑤講師院 国内寺院の監督・僧尼に指導を担う国師(講師)の施設。北方建物付近か?

⑥賤院 寺の下働きをする人が居住する区域。薬師堂周辺の竪穴住居を想定(甲野勇説)。

1. 史跡整備に伴う僧寺地区の発掘調査とその成果（平成 15～24 年度）

(1) 武蔵国分寺跡の発掘調査の歩み

江戸時代 幕末に編纂された各種地誌類に、多摩郡国分寺村の項で、礎石や表採された瓦（文字瓦）の紹介記事あり（『新編武蔵風土記稿』・『江戸名所図会』・『武蔵名勝図会』など）。

明治・大正時代 礎石・瓦の詳細な分布調査が行われる。大正 11 年 10 月 12 日 国の史跡に指定。

昭和 31・33 年 日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会（代表：石田茂作）による初めての発掘調査。
金堂・講堂

昭和 39～44 年 早稲田大学等（国分寺市教育委員会委託 代表：滝口 宏）による発掘調査。
国分尼寺・七重塔・中門・北院址

昭和 49 年～ 国分寺市教育委員会・国分寺市遺跡調査会による調査体制整備（以後、約 750 次に及ぶ調査実施）

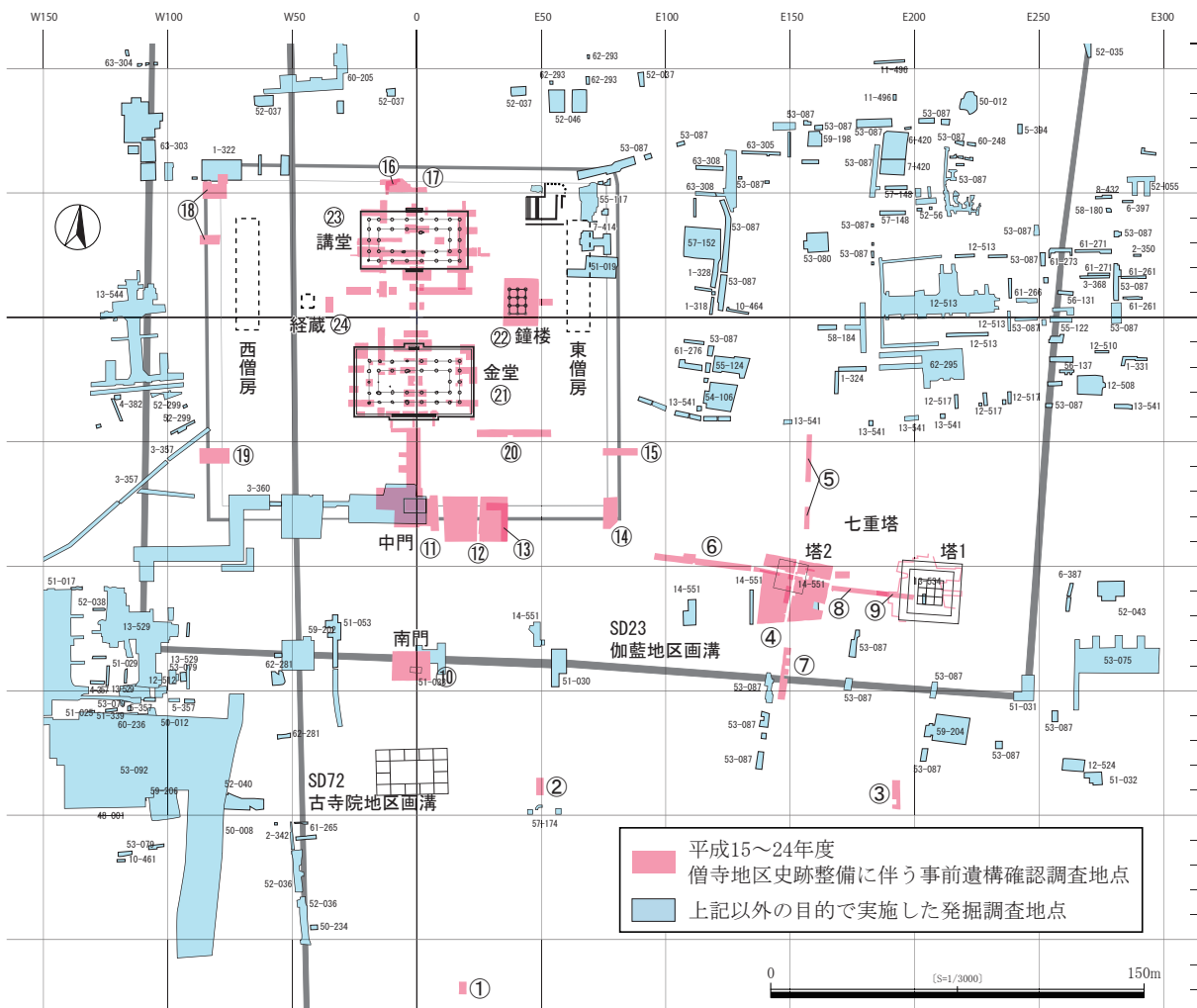
第 1 期 昭和 49 年～平成 3 年 伽藍地・寺院地確認および史跡整備に先行する確認調査

第 2 期 平成 4～7 年 尼寺地区整備事業に伴う事前遺構確認調査

第 3 期 平成 15～24 年 僧寺地区整備事業に伴う事前遺構確認調査（その 1）

→第 3 期の調査によって、僧寺地区の主要堂塔の規模・構造等が解明された。

平成 23 年～ 発掘調査成果に基づく史跡保存整備工事に着手 ※平成 43 年度完了目標



第 2 図 僧寺地区中枢部・伽藍地周辺の既往の発掘調査地点
（图中 1～24 は、平成 15～24 年度の調査地点）

(2) 七重塔の調査 ※平成 15～19 年度調査

従来からの七重塔を「塔跡 1」、新たに発見された塔基壇を「塔跡 2」と呼称。「塔跡 2」は、平成 15 年度に実施した地下レーダー探査ではじめてその存在が確認された。

a. 塔跡 2 の調査 (第 3・4 図)

①位置

僧寺伽藍中軸線から東方に約 151 m、塔跡 1 の心礎から約 55 m 西方に位置する。

②建物規模

不明。四天柱・側柱の礎石や、根固め石等の礎石を据え付けた痕跡が未検出で、基壇上面も削平されている。

唯一、柱の抜取痕、または礎石の据え付け痕跡と考えられる直径約 3 m の略円形の掘り込みが検出されている。

③基壇規模

四周が耕作などにより攪乱され、基壇外装や雨落ち溝等も未検出で不明。

④掘込地業

中心部が一辺約 11.2 m 四方でほぼ垂直に掘り込まれ、その外側にも同じ版築土が広がり、一辺約 20 m 範囲に及ぶ。僧寺中軸線に対して約 6° 東偏する。

深さは地山面より約 2.3 m、版築の厚みは最大で 3.1 m を測り、版築は全体で 28 層以上の緻密で堅固な土で構成。

⑤時期

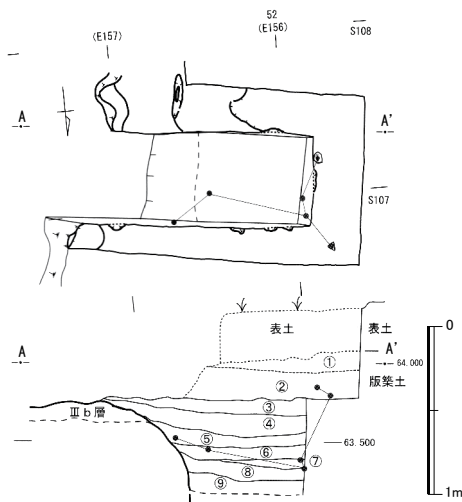
基壇内から出土した遺物と他の遺構との新旧関係から、9 世紀中頃に基礎地業が造られたことが判明。

⑥その他

発見された基壇上に実際に塔が建っていたか否かは明確ではない (どちらの可能性もある)。



第 3 図 塔跡 2 調査全体図



- ① ローム土からなる版築土
- ② 黒色土からなる版築土
- ③ ローム土主体の版築土
- ④ 黒色土・Ⅲ層土・ローム土からなる版築土
- ⑤ 黒色土主体の版築土
- ⑥ ローム土からなる版築土
- ⑦ ローム土主体の版築土
- ⑧ Ⅲ層土主体の版築土
- ⑨ ローム土主体の版築土

※平面・断面図中のドット(●)は、5の土師器坏片出土位置を示す。



第4図 塔跡2 Dトレンチ内の遺物出土状況と塔跡2出土遺物

b. 塔跡1の調査(第5図)

【昭和39・40年度の調査で判明していたこと】

- ① 塔跡1は同じ場所に創建・再建され、『続日本後紀』承和2(835)年3月23日条にみられる創建塔が火災を受け、その10年後に前男衾郡大領の壬生吉志福正が再建を願い出て許可されるという記事に対応する事象と結論付けられた。
- ② 基壇は一辺約17.7m四方の乱石積基壇で、その周囲には幅約2.5m～3.0mの石敷が広がる。基壇外装は、乱石積で河原石を3段積んだ状態を確認。
- ③ 掘り込み地業は、深さ約1.7m(表土を除く)を測る。
- ④ 基壇外周の石敷きは白色粘土によって構築され、その粘土中から焼損した瓦が出土していることから、火災後に再建されたと想定された。

【平成18・19年度の調査】

- ① 塔跡1は、同じ場所で創建・再建の2回建てられ、再建は火災を受けた後であることが追認された。
- ② 『続日本後紀』にみられる承和二年の七重塔の被災は、創建時の塔跡1と考えられる。
再建時期については、従来とおり9世紀中頃と考えられるが、承和十二年の壬生吉志福正によって再建が許可された塔であるかは明確ではない。
- ③ 塔跡1の基壇の外側では南北溝が確認され、規模から塔跡1の区画溝(塔院?)の可能性などが想定される。
- ④ 塔跡1と塔跡2との掘り込み地業(地固め)の様相は全く異なる。塔跡2の方が丁寧。
- ⑤ 塔跡1の再建と、9世紀中頃に建立された塔跡2との前後関係は不明。

c. 塔跡1・2の造塔時期をめぐる解釈—調査関係者間で見解が分かれる(次項の表参照)

- 1 従来の見解(滝口宏説)
- 2 A説 塔1再建塔が塔2に先行する。
- 3 B説 塔2が塔1再建塔に先行する。再建時期の見解分かれる 有吉重蔵・中道誠説と坂詰秀一説
- 4 その他(福田信夫説)



第5図 塔跡1全体図

表 七重塔再建時期をめぐる諸説

		創建期	承和2(835)年	承和2~12年	承和12(845)年	承和12年以降	元慶2(878)年	元慶2年以降	文献等
1	従来の見解	塔1 築造	塔1 雷火焼失			塔1(同位置) で再建塔築造			1986滝口 ※1964年調査時 の所見に基づく
2	A説 (塔1再建 塔が塔2に先 行)	塔1 築造	塔1 雷火焼失			塔1再建塔 築造	塔1再建塔が 倒壊?	塔2基壇築造 (未完成)	
3	B説 (塔2が塔1 再建塔に先 行)	塔1 築造	塔1 雷火焼失	塔2基壇築造		塔2基壇築造 (未完成)→ 塔1再建塔築造			中道2012 有吉・中道2013
4	B'説 (塔2が塔1 再建塔に先 行)	塔1 築造	塔1 雷火焼失			塔2基壇築造 (未完成)	講堂・中門 も倒壊	塔1・講堂・中門 再建	坂詰2012
5	先後関係不 明	塔1 築造	塔1 雷火焼失			『続日本後紀』が 伝える再建塔が、 塔1再建塔か塔2か は未確定			(福田2012)
備考					壬生吉志福正の 塔再建願許可 (『続日本後 紀』)		坂東諸国国分寺 地震による被害 (『日本三代実 録』)		

※A説・B説は、平成21年3月20日付『読売新聞』「武蔵国分寺の七重塔」と題する記事で紹介。

(3) 講堂跡の調査 (第6図) ※平成20・21年度調査

①建物規模・構造

- ・8世紀中頃に創建され、その後、建物全体を建て替える大規模な改修を行っている。
- ・創建時は、桁行5間(東西約28.5m)、梁行4間(南北約16.6m)、南北二面廂の切妻造。
- ・再建時は、桁行7間(東西約36.2m)、梁行4間(南北約16.6m)の四面廂建物、屋根は入母屋造もしくは寄棟造。

②基壇の設え

- ・創建時・再建時、ともに瓦積基壇外装。
- ・創建時は、場所によって基底の使用部材が異なる。東西は河原石を主体に一部女瓦片、西面南側は完形の男瓦、西面北側は女瓦片を使用し、基底の上に女瓦・男瓦を積む。基壇規模は東西約34.4m、南北約22.6mをはかる。
- ・再建時は、磚を基底としてその上に瓦片を積み、基壇規模は東西約42.2m、南北約22.6mをはかる。

③階段

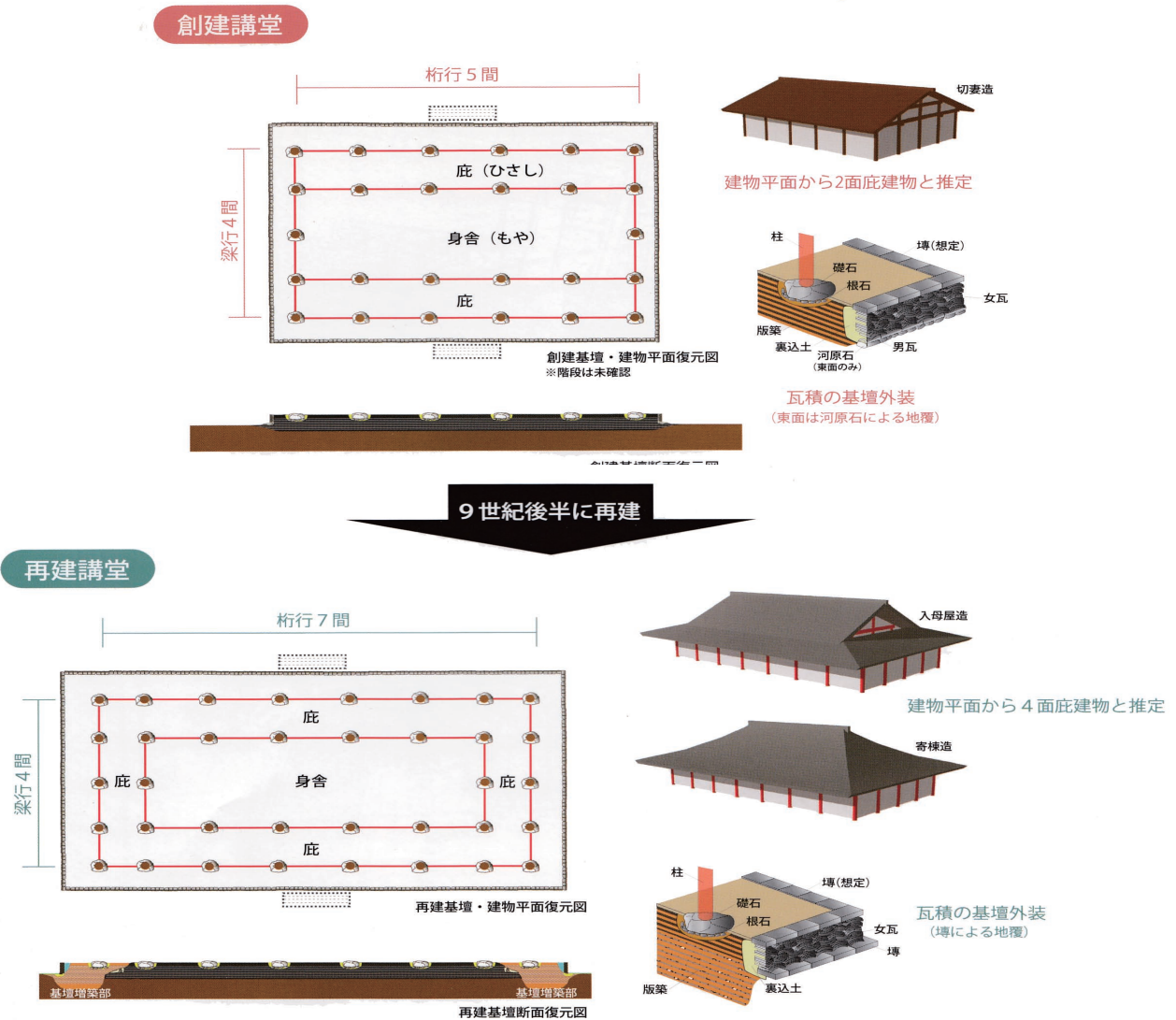
- ・再建時の階段構築土が、基壇の南面と北面のそれぞれ中央付近で発見。規模等は不明で、構築土の残存範囲から凡そ建物中央間1間分の幅で設置されたと思われる。

④再建の時期

- ・増築部の版築層の出土瓦(昭和31年度調査)や再建瓦積基壇外装の瓦の様相から、9世紀中頃以降に比定される。その要因として、弘仁9(818)年、元慶2(878)年の東国を襲った地震による被災の可能性が考えられる。

⑤廃絶時期

- ・基壇周囲に焼土を含む層が存在。また基壇は中世以降の土坑に壊され、中世初頭には機能を失ったと想定される。



第6図 講堂跡変遷概念図

2. 武蔵国分寺周辺の東山道武蔵路

(1) 東山道武蔵路とは

①古代の行政区分

「五畿七道」 畿内（大和・山背・摂津・河内・和泉国）一都が置かれた古代日本の政治的中心地

七道（東海・東山・北陸・山陽・山陰・南海・西海道）

一地方の行政区画を表すとともに、都と諸国の国府を結ぶ古代の幹線道路でもあった

※平安時代の『延喜式』に記載された、古代道路網の総延長は約 6,300km

＝昭和 41 年の第一次高速道路計画の路線距離にほぼ匹敵

②古代の駅制

公使・官人による中央と地方の交通・情報伝達制度

都と諸国の国府を結ぶ幹線道路には、30 里（約 16km）ごとに「駅家」があり、駅馬と駅長を配置

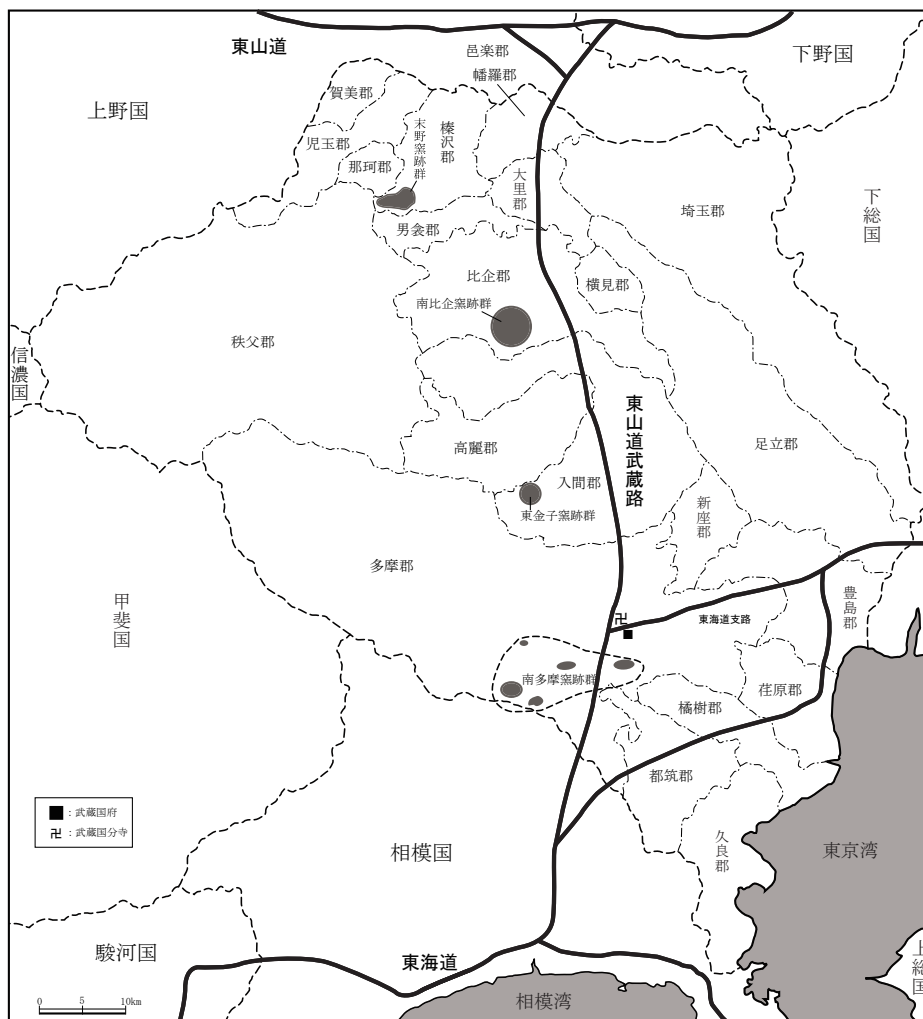
養老律令廐牧令の規定では、大路（山陽道）の駅家に 20 疋，中路（東海・東山道）に 10 疋，小路（北陸・山陰・南海・西海道）に 5 疋ずつの駅馬，海・大河沿いの駅家には 4 疋以下の船の配備が定められた

③武蔵国の地方行政状の位置づけ

当初は東山道諸国の一つ → 奈良時代後半から東海道諸国へ編入

『続日本紀』宝亀 2 (771) 年 10 月条「太政官奏す。武蔵国は山国と雖も，兼ねて海路を承く。公使繁多にして祇供堪え難し。其の東山の駅路は，上野国新田駅従り下野国足利駅に達す。此れ便路道なり。而るに枉げて上野国邑楽郡従り五ヶ駅を経て，武蔵国に至る。事終つて去る日，又同道を取りて下野国に向かう。

（中略）東山道改めて東海道に属せば，公使所を得て人馬憩うことあらんと。奏可す。」



第 7 図 武蔵・相模国周辺の古代駅路と東山道武蔵路

(2) 国分寺市内の東山道武蔵路と保存が叶った調査事例（泉町地区と西元町地区の調査）

古代道路としての認識

昭和 50 年代頃 国分寺・府中市内で南北に一直線状に結ばれる約 12 m の並行する溝跡を発見
古代道路研究の高まりとともに、北関東地方と武蔵国府を結ぶ東山道支路として次第に認識が高まる
平成 26 年現在、市内では約 60 地点で東山道武蔵路に関連する道路遺構を検出

道路遺構の保存事例

昭和 63 年 日本国有鉄道の民営化に伴う J R 西分寺駅周辺の再開発事業（公園・公共施設・住宅等建設）

平成 5～13 年 泉町地区で大規模な発掘調査が行われる。

平成 7 年度の調査で、総延長約 400 m にも及ぶ古代の道路遺構が出現し、道路の構造・規模の他、4 時期にわたる変遷過程が判明。

第 1 期 東西幅約 12 m の側溝を伴う道路跡。

第 2 期 第 1 期の側溝が埋没した後に使用された道路で、道幅は不明。

第 3 期 第 1 期の側溝に重複して掘られた幅 9 m の東西両側溝を伴う道路跡。

第 4 期 第 1～3 期の道路に比べて主軸方向が北東に傾いて蛇行し、切通し状に掘りこまれた道路。

※市民・学識経験者による保存運動の盛り上がりにより、開発事業計画の変更→道路跡の保存が決定

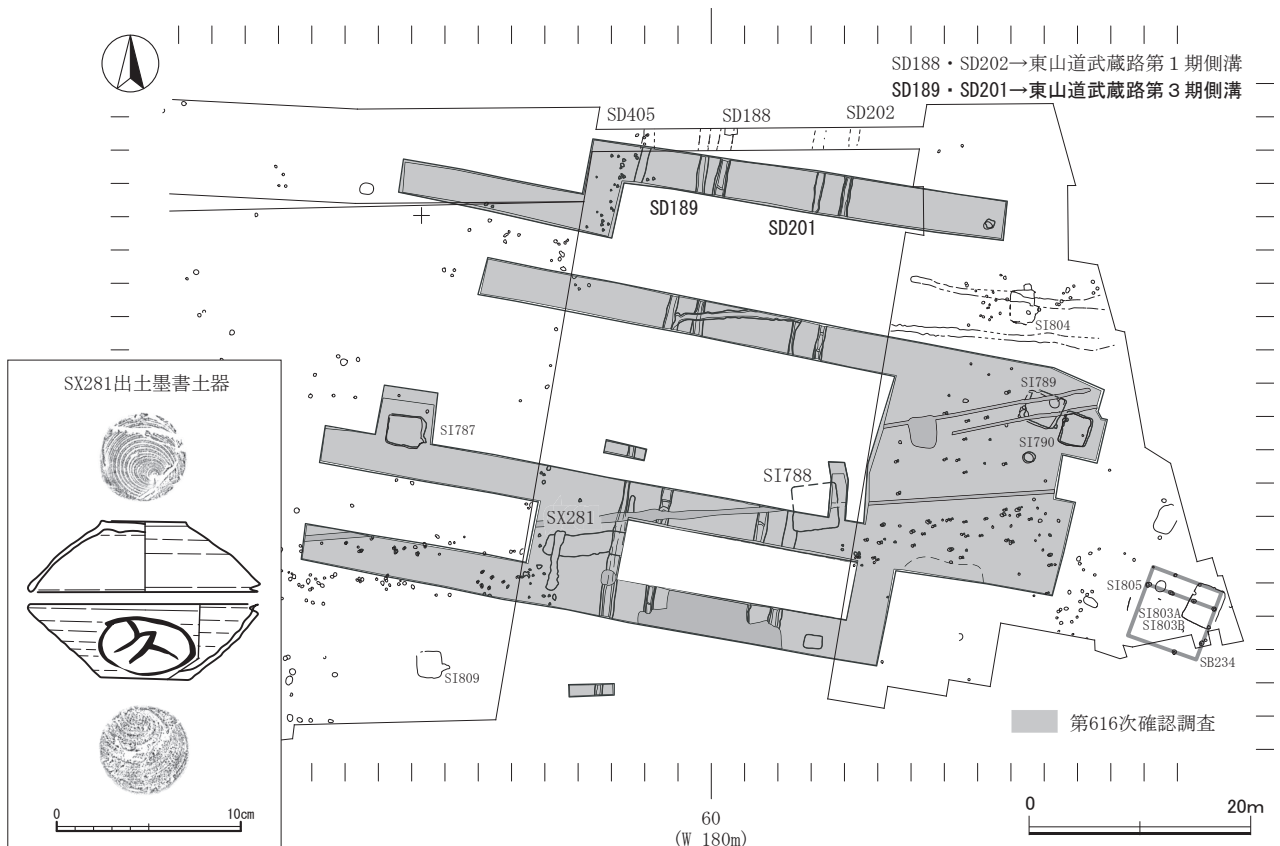
平成 18 年 旧市立第四小学校跡地にて東山道武蔵路の確認調査実施

泉町地区の第 1・3 期道路側溝の延長部分とともに、道路と重複する竪穴住居・祭祀遺構を発見。

合わせ口の状態で須恵器坏 2 個体が出土。うち 1 点は「久」の字を丸で囲う墨書土器。

墨書の意味するもの（小野本敦氏の説）

- ・『宇治拾遺物語』巻第 14 の 10 「御堂関白の御犬 清明等奇特の事」
- ・『延喜式』 道饗祭に係る「久那斗」 道祖神信仰



第 8 図 旧第四小学校跡地の東山道武蔵路